

エディトリアル

横須賀市立うわまち病院 副管理者・小児医療センター長 宮本朋幸

今回は、地域医療を支える皆さんにとって、診断するのも、治療するのも、管理するのも困難を伴う疾患群である発達障害について特集を組んだ。国民の認知も広がっている「発達障害」という疾患概念は有病率も高く、地域で遭遇する機会も多い。本特集では、7名のエキスパートの方々に寄稿していただいた。

加藤永歳先生には、総論として発達障害者支援法に基づく厚生労働省の支援策を中心に述べていただいた。自治体規模に応じた支援システムの在り方が提示され、地域医療を担う医療者たちの心構えを説いていただいた。

庄紀子先生には、自閉症スペクトラムをお願いした。庄先生が勤務する神奈川県立こども医療センターの児童精神科を受診する初診患者の40%が自閉症スペクトラムであるという事実は、この疾患群の有病率の高さを示唆する。本稿では、各年齢層での対応法や、薬物治療まで詳細に解説されている。

山下裕史朗先生には注意欠如・多動症についてお願いした。診断のポイントが詳しく解説され、治療法のひとつであるペアレントトレーニングは示唆に富む。地域で活動する医療者の役目についても語られており有用である。

限局性学習症(SLD:Specific Learning Disorder)という最新版のDSM-5-TRで定義された疾患概念について、岡牧郎先生に解説していただいた。SLDの各種の病型や特徴が記載され、診断へのフローチャートは役に立つ。また、医療資源が少ない地域でのこのような子どもたちに対処する方法や心構えも教えていただいている。

プライマリ・ケアにおける対応法としては、実際にクリニックで活躍されている本田真美先生をお願いした。外来での発見方法や、日常診療へのアドバイスなど、地域を守る医療者にとって参考になることが多い。さらに、地域での多くの機関との連携についても解説していただいている。

杉山登志郎先生には児童精神科の待機問題を主に解説していただいた。有病率が高いこの疾患群の担い手が少ないことが原因であり、医師の層を厚くしなければならないとされている。地域医療を担う本誌の読者も、この疾患群に向き合うことは避けては通れず、本稿に示されたシステムを地域で展開できるようになることが望まれる。

熊崎博一先生には、AI、ロボットを発達障害の診療に導入する試みについて書いていただいた。離島医療にロボット診療を取り入れるアイデアは、本誌の読者のみにとどまらず、全ての医療者の参考になるだろう。さらに、育休中などの医師のスキル維持に役立てる方法も解説していただいた。

本特集は、地域で診療に取り組んでいる方たちにも、さらには、発達障害の診療に困難を感じている方たちにもとても有用なものとなっている。ぜひ、お仲間にも推薦していただきたい。